《報告》

「第Ⅲ回ルドルフ・オットー・シンポジウム」に参加して

木越　康

一

一九九九年五月六日から九日までの四日間にわたって、ドイツのマールブルク大学において、「仏教とキリスト教―浄土真宗と福音神学」というテーマのもとに、同大学神学部と大谷大学との共催により「第三回ルドルフ・オットー・シンポジウム」が開催された。このシンポジウムは、ドイツのプロテスタント神学者であり、またキリスト教と諸宗教との比較交流に力を注いだルドルフ・オットーを記念して行われるもので、オットーの意志を受け継ぐ同大学神学部が、諸宗教との対話の活性化を図ることを目的として開催を続けてきたものである。第一回目は一九九三年に「形あるものと形なきもの―諸宗教の美意識における伝統と革新」、第二回目は一九九六年に「イスラム教とキリスト教における解釈学」と題して行われ、今回が三度目の開催である。

二

マールブルク大学は、一五二七年に創立されたドイツでも古い伝統を有する大学の一つで、特にその神学部は、ルドルフ・オットーをはじめ、ルドルフ・ブルトマン、F・ハイラー他、世界的に著名な神学者や宗教学者を多く排出している。この伝統あるマールブルク大学と大谷大学が共催でシンポジウムを行ったことについて、同シ

ンポジウムの発表者の一人であった児玉暁洋氏は、朝日新聞の紙面で「宗教改革によって成立した福音神学と、貴族仏教を解体して大衆の仏教を実現した浄土真宗」との出あいであったと報告している。福音神学は、ルターの宗教改革に端を発して展開することになった神学の伝統に立つものである。ルターによる「信仰によってのみ」の主張は、キリスト教神学とその宗教的救済を、カトリック教会の権威から解放し、個々の民衆の自覚の上に、キリスト教信仰を回復する意味を持つものであった。そのような改革運動と思想とを起源に持つマールブルク大学の福音神学と真宗学との出会いは、児玉氏が指摘するように、まさに信仰を貴族的権威から解放した宗教的伝統に立つもの同士の、教学レベルでのはじめての出会いという、深い意味を持つものであったと言えるであろう。

今回大谷大学とマールブルク大学との交流が実現した背景には、同大学神学部教授ハンス＝マルティン・バルト博士と同大学宗教学部教授マイケル・パイ博士の人力によるところが大きい。特に、現在、世界宗教学会会長でもあるパイ教授は、仏教に関しては深い理解を示し、真宗との関係においては国際真宗学会のメンバーでもある。一九九三年に大谷大学を会場として開催された国際真宗学会第六回大会においては「精神主義のより広い意味」と題した研究発表を行っており、より広い視野から清沢満之の精神主義について検証を加えた。この発表は、現在の清沢満之研究においても非常に意義深いものであったと考えられる。また同氏は、一九九五年には大谷大学「大学院特別セミナー」の客員教授として招聘され、「宗教における伝統、革新、反省」というテーマで講義をし、さらに一九九六年には「比較宗教学―宗教の本質と形態」というテーマで講義を行っている。

三

今回のシンポジウムは、五月五日午後四時、マールブルク大学からは神学部長デートリヒ・シュトルベーク博士、大谷大学からは訓覇曄雄学長による開催の挨拶がなされた後、パイ教授から「仏教とキリスト教との対話の歴史及びその問題点」、大谷大学箕浦恵了教授からは「仏教とキリスト教の対話の可能性について」と題する基調発表がなされた。この両方の発表は、大会の幕開けにふさわしく、まさにキリスト教と真宗の対話の可能性とその諸問題を考察したものであった。特に箕浦教授か

らは、両宗教の意味ある出会いは「地平融合」の努力を試みることによってその可能性が開かれていくものであることが指摘され、その糸口は、人間の「罪」の問題にあるのではないかという提言がなされた。この両教授による幕開けの講演の後、同日午後八時からは、六つのテーマで、三日間にわたってシンポジウムが進められ、本格的な対論が行われた。各テーマとそれぞれの発表者は、以下の通りである。

①信仰によってのみ—念仏
　ハンス＝マルティン・バルト（マールブルク大学）
　木越　康（大谷大学）

②神—阿弥陀—涅槃
　寺川俊昭（大谷大学）
　クラウス・オッテ（バーゼル大学）

③恩寵—他力・責任とエートス
　クリストフ・ゲストリッヒ（ベルリン大学）
　安富信哉（大谷大学）

④現代社会における社会倫理の諸問題
　ヴォルフガング・ネットフェル（マールブルク大学）
　宮下晴輝（大谷大学）

⑤精神の道しるべ
　ゲルハルト・マルセル・マルティン
　児玉暁洋（前真宗大谷派教学研究所長）

⑥祈りと瞑想
　ディートリッヒ・コルシュ（マールブルク大学）
　高田信良（龍谷大学）

シンポジウムの会場となった神学部講堂は、カトリック修道士達が改革派勢力によって教会を追われる絵や、マルティン・ルターやツヴィングリをはじめとする宗教改革者達が、マールブルク会議と呼ばれる宗教者会議に向かう絵などが壁全体を覆う、壮大な建物である。大会期間中は、この中世的な雰囲気の漂う講堂が、学生や市民、さらにはヨーロッパ各地から集まった神学者・宗教学者などで埋まり、開会式当日は二〇〇名を越える参加者、期間中は連日一〇〇名を越える参加者があった。発表者同士の討論の後には、これら一般の参加者からも熱心な質問が寄せられ、特に親鸞の思想に対する関心度が、日々高まっていった印象が強く残るものであった。

また大会初日から、同講堂の内外を利用して、親鸞に関する展観も同時に開催された。「熊皮の御影」「影の御影」をはじめとする親鸞の肖像や名号類、さらには『伝

絵』等にいたるまで、視覚にも訴えながら真宗を紹介していこうという主旨に、大会参加者もおおいに興味をひかれたようであった。特に展観品の中に含まれていた『観無量寿経・阿弥陀経集註』などに見られる親鸞の学習の跡や、『唯信鈔文意』や『尊号真像銘文』などの著作類は、念仏者親鸞から教学者親鸞へと、親鸞に対するイメージをいっそう膨らませたようであった。

大会三日目の早朝には、同会場後方に特別に設えた名号本尊・荘厳の前で、東本願寺からの一般参加者を含めた日本側参加者全員によって、晨朝勤行も勤められた。訓覇学長の導師で、伽陀・歎仏偈・正信偈・念仏・和讃・回向の次第でおよそ四〇分、パイプオルガンと賛美歌からなるキリスト教会における壮大な礼拝儀礼とは異なる厳粛な雰囲気に、会場全体が仏教的香りに包まれたひと時であった。

四

以上のような形で、四日間にわたって行われたシンポジウムであるが、最終日の総合討議での寺川教授とバルト教授の全体総括が、非常に熱心で質の高い討議がなされた今大会を締めくくるのにふさわしい言葉として、特に私の印象に残った。寺川教授は、今回のシンポジウムを通して、福音神学に対してある種の近さを感じることになったと述べた。そしてそのような印象の前では、同じ日本の宗教である神道や、同じ伝統に立つはずである他の仏教との距離は、むしろ遠いと言わざるを得ないという主旨の総括をした。またバルト教授は、今回のシンポジウムではっきりしたことは、キリスト教（福音神学）と真宗の二つを統合するもの、その架け橋となるようなものは何もないということであり、両者は近いように見えても、決定的に遠いものであるということを確認した。このバルト教授によってなされた確認は、決して今後の対話を拒むようなものではなく、また、単にキリスト教の宗教としての優位性を確認するためになされたものではなかった。そしてまた、これは寺川教授の発言と矛盾するものでもなかった。むしろ、寺川教授の指摘と同じ事柄を意味するものであったように思われる。

バルト教授は、神学者であると同時に、もちろん明確な宗教的信念のもとにキリスト者として立つ者である。しかし彼は、今回のシンポジウムを通して、彼自身と全く同じほど明確な宗教的信念のもとに立つ他者に出会ったのである。それは、親鸞であり、またその僧伽である。

二つの宗教を統合するものはないというバルト教授の確認は、自身がキリスト教の信仰に立つのであるということを確固たる信念のもとに確認するものであると同時に、それと同じ信念の確立が、真宗の中にもあるということの発見であったのである。

五

宗教間の対話は、双方の類似点を並べることによってお互いに歩み寄ろうとしたり、また、容易に一方が一方を包括しようとする包括主義的傾向に流れがちである。しかしそのような対話は、全く意味がないであろう。対話とは、お互いが歩み寄ることではなく、また決して一つになることを目的とするものではない。宗教観の対話とは、自己の宗教的信念を表明していくことによって、むしろ互いの宗教伝統の差異が明確にされていく過程なのであろう。しかし、互いの宗教的選び（選択）が純潔であり明確であればある程、そのお互いの差異を、信頼と尊敬をもって確認していくことができるのである。キリスト教と真宗の両者は、決して相容れるものではないというバルト教授による確認は、決別や自己の優位性を語る言葉ではなく、互いに対する尊敬と信頼が生まれたことから発せられた言葉であったのである。ルターの「信仰によってのみ」と親鸞の「唯信」は、言葉は近しいが、二つを結ぶ橋は容易には見つからないのである。しかし、互いに宗教者としての尊敬と信頼がある限り、今後とも相互の対話は、ますます盛んに行われていくことができるのである。

バルト教授は最後に、今回の出会いは、両者の交流のはじまりであることを述べた。そして今後のさらなる対話を念願し、また約束した。それは、日本側を代表して最後に挨拶に立った大河内了義教授も同じであった。大河内教授も、この出会いが、はじまりであることを力強く確認し、挨拶を閉じた。異なる宗教が真に対話を深めていく出発点が確認されたのである。それは互いの信仰に対する信頼と尊敬である。

このような出会いは、決して容易ではないであろう。つまり、相違性の確認が信頼と尊敬につながることは、宗教観の対話においては、決して常ではないであろう。むしろ、相違性の確認が、決定的断絶の確認となる場合が、圧倒的に多いと言わざるを得ない。しかし、今回のシンポジウムによって、福音神学と真宗学との対話の門戸は、信頼と尊敬の中に確かに開かれたのである。

六

本シンポジウムにあったって、親鸞の思想を理解するための基礎テキストとして日本側から『唯信鈔文意』のドイツ語翻訳本が用意された。この翻訳は、大河内了義教授が中心となって作業が進められたものであり、およそ一年半をかけて検討し出版されたものである。このテキストについては、今大会を受けてさらに翻訳に検討を加え、改訂した上で出版される予定である。また、近代教学の海外への紹介を目的として大谷大学真宗総合研究所で翻訳作業がすすめられているもののうち、すでに翻訳済みの清沢満之・曽我量深のものが小冊子にまとめられ、同会場で紹介・配布された。

本報告では、『親鸞教学』出版の期日の関係もあり、各セッションの内容や、質疑について、詳しく報告することができなかった。発表の詳細については、まずはじめにマールブルク大学側からドイツ語で出版されることになった。そこでは全セッションの発表はもちろん、質疑の内容等も掲載されることになるであろう。その出版を受けた後、大谷大学でも、同報告の日本語訳版が出版される予定である。大会発表等の詳細については、その報告をお待ちいただきたい。

また、ここですでに紹介した講演者・発表者以外に、翻訳・通訳・展観準備・大会記録等で大谷大学から同シンポジウムに参加したメンバーは、次の通りである。友田孝興、アルブレヒト・デッケ＝コルニル、ロバート・F・ローズ、門脇健、加来雄之。最後にメンバーを紹介して、この報告を終えたいと思う。